

## 望月哲男グレイテストヒッツ

### はじめに

望月哲男先生についての勉強会である。心して、リラックスして挑んでもらいたい。今回は、先生の研究成果や研究業績、興味範囲などについて概観するとともに、高橋源一郎先生との接点をさぐるための、予備的な勉強会である。

望月哲男先生といい、高橋源一郎先生といい(以下敬称略)その業績はともに膨大なものである。いくらなんでも全部を一気には扱えない。また、専門多岐にわたるものもあるので、予習や研究が必要なものもある。したがって、この勉強会を「たたき台」とし、次回、会員たちの興味がありそうなところを集中的に取り上げるという形をとることにした。

また、今回はあくまでも「望月哲男」という研究者の勉強会であり、彼の研究についての勉強会ではない。そうした領域については、次回。

論文などはそれぞれ会員が読んでもらいたい。というか、できれば全論文、全翻訳、全エッセイの読破をめざされたし。

もうひとつ。今回取り上げるものはほとんどが「北大スラブ研究センター」HP内『オリジナルのデータベース』により入手可能である。是非ともググって手に入れてほしい。  
<http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/originaldb.html>

「現代ロシア作家」  
<http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/literature/literature-list.html>

### 1 経歴、業績

この章では、現段階におけるいくつかの研究業績と経歴を概観しておきたい。一応オフィシャルサイトのものを簡単に概説する。以下はその引用である。

参考スラブ研究センター『研究員点検評価2001年』 『望月哲男』  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/tenken/2001/mochizuki.html>

**学歴:**1951 年生まれ、1975 年東京大学文学部卒、1978 年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、1982 年同博士課程単位取得退学

**職歴:**1982 年東京大学文学部助手、1986 年北海道大学スラブ研究センター助教授、1994 年同教授

## 1. 研究主題：文学、ロシア近代文学、ロシア文化思想

具体的には、「研究領域」として以下のように説明されている。

近代ロシア文芸・文化思想の研究:主として 19 世紀のロシア文学および評論を題材にして、近代ロシア文芸の様式的特徴、思想的意味、社会文化的役割・機能などを、比較的・総合的に研究する。また文芸研究を通じて、近代ロシア社会と文化の特徴および文化思想史上の意味や新しい解釈の可能性を追求する。

a) フョードル・ドストエフスキーの文学と思想=現代文学論や文化思想の成果を踏まえながら、ドストエフスキーの作品と思想を新しく意味づける。成果:『ドストエフスキー:評論家と小説家』『スラヴ研究』

No.39(1992)pp.131 - 152 / "Temakazuistikav romane`Brat'iaKaramazovy", *Dostoevskii v kontse XXveka*, Moskva, 1996, pp.289 - 297 / "The pendulum is swinging insensibly and disgustingly: Time in "Krotkaia", *Dostoevskii Studies, New Series, Vol.IV* (2000), pp.71 - 82 / 『ドストエフスキーの小説『おとなしい女』にみる時間意識』木下豊房、安藤厚(編著)『論集・ドストエフスキーと現代』(多賀出版、2001)pp.153 - 172

b) アポロン・グリゴリエフ、ニコライ・ストラホフなど「土地主義」の文化論:19 世紀ロシアにおける民衆文化と知識人文化の融合の志向を代表するものとして、土地主義の文化・文芸理論を研究。主な成果:『有機的批評の諸相:アポロン・グリゴリエフの文学観』『スラヴ研究』

No.37(1990)pp.1 - 41 / "Uistokov teatraino - kriticheskoi kontseptsii Ap.Grigor'eva: Razmyshlenii apopovodu odnoimaloizvestno istat'i", *Acta Slavica Iaponica* No.8(1990)PP.13 - 23

c) ロシア文芸の場としてのペテルブルグ 1 近代ロシアの諸特徴を集約したペテルブルグという空間の文化史的意味づけ。成果『ペテルブルグ文学』川端香男里、中村喜和、望月哲男編『スラブの文化』(弘文堂、1996)pp.183 - 210

d) ロシア文化・文学理論の研究:ロシア近代文化論の好適な枠組みであるフォルマリズムや文化記号論を研究する。主な成果:『ドストエフスキー論をめぐって--パフチンの内部と外部』『ミハイル・パフチンの時空』(せりか書房、1997)pp.108 - 117 / (共訳)J.ボウルト著『ロシア・アヴァンギャルド芸術:理論と批評,1902 - 34 年』(岩波書店、1988)pp.3 - 195 / (共訳)M.パフチン『ドストエフスキーの詩学』(筑摩書房、1995)pp.1 - 590 / (共訳)ユーリー・ロートマン『ロシア貴族』(筑摩書房、1997)pp.1 - 545, I - XI

現代ロシア文芸の研究:体制変動後のロシア文芸の研究を通じて、現代ロシアにおける文化状況や思想状況、文化と社会体制の相関、歴史意識や文化的自己認識の表現としての文学の機能、文芸におけるグローバリズムとローカリズムの関係、20世紀ロシアの経験の世界史的な意味などを考察する。

a)文化思想、文芸潮流の研究:現代ロシアの文芸の特徴を総合的に性格づける。主な成果:(共著)『現代ロシア文化』(国書刊行会、2000)pp.419+14/(編著) *Russian Culture on the Threshold of a New Century*, Sapporo: Slavic Research Center 2001. pp.1.308 / 「思想状況」木村汎編『もっと知りたいロシア』(弘文堂、1995)pp.72-97 / 「ポストモダンと現代ロシア文学」『ロシア文学の変容』(スラブ研究センター、1996)pp.61-85 / "Postmodernism in Russian Prose Literature of the Nineties", Bettina Henneta l.(eds.) *Das Eigene und das Fremde in der russischen Kultur: Kontinuität und Diskontinuität in der Selbstdefinition in Zeiten des Umbruchs*, Ruhr - univ. Bochum, 2000, pp.63-96

b)文芸作品の解題・解釈:今日の代表的な文芸作品を解題し、また翻訳するとともに、文化論的な語彙で性格づける。主な成果:(翻訳)ヴラジミール・ソローキン『ロマン I・II』(国書刊行会、1998)pp.417,375 / (解説)「ヴラジミール・ソローキン『青脂』」『現代文芸研究のフロンティア(1)』(2000)pp.32-40 / 「ヴィクトル・ペレーヴィン『ジェネレーション P』」(同上)pp.68-76 / 「ヴラジミール・マカーニン『アンダーグラウンドあるいは現代の英雄』」(同上)pp.111-118 / (翻訳)アレクサンドル・ゾロチコ「アンナ・カレニナー2」『現代ロシア文学作品集 X』(北大露文・スラブ研究センター、2001)pp.46-48 / (部分訳と解説)「ヴィクトル・ペレーヴィン『ジェネレーション P』」『早稲田文学』2001, No.9, pp.4-12 / (共訳)グリゴリー・チハルチシヴィリ(『自殺の文学史』(作品社、2001)pp.373

c)古典の現代的解釈や展開:主としてドストエフスキーの作品の現代的適応・改作やパロディなどを素材に、現代文芸における古典や伝統文化への意識を分析した。成果:「ドストエフスキーのいる現代ロシア文学」『ロシア文芸研究のフロンティア(II)』(スラブ研究センター)2001)pp.132-199 / "Igraiasoslovam klassiki: Dostoevskii v sovremennoi literature", Tetsuo Mochizuki(ed.), *Russian Culture on the Threshold of a New Century*, Sapporo: Slavic Research Center, 2001, pp.159-177 / 「現代ロシアのゴーゴリ」『ロシア文化通信群 18』(群像社、2006.28)P.2-3

d)現代ロシア文芸データベース:「現代作家データベース」と「現代文学作品データベース」。スラブ研究センター・ホームページにて公開。

あと、「現在研究中の課題として以下のものもあげられているが、上述のものそれぞれ関連性があることはいうまでもない。

19世紀と現代 - 文芸における対話  
現代ロシア文芸における時空間意識の総合的研究  
ロシア・リアリズム文芸の思想的・歴史的意味

レジュメ末にあげる膨大な研究論文と作品解説の量が、具体的な研究業績である。ほかにも「スラブ研究センター40周年に寄せて」や「研究室だより」のようなエッセイもある。なお、すでに2006年度版の『研究員点検評価』もPDFで閲覧できる。そちらの業績も、形式はほぼ上記のものに準じるようであるが、2001～06年度までのものが所収されている。

## 2 研究業績と興味範囲の整理。

望月哲男の研究業績は非常に多く、広い。それでも、講演会との結節点をさぐるためには、これらの研究業績の整理が必要と思われる。すでに概観したものと別に、どのような関連性のもとに研究を進めてきたかを考えよう。

私の勝手な整理を許されるなら、以下のような整理の仕方が適当と思われる。

ドストエフスキーに関する研究。  
近代ロシア文芸思想の研究  
ロシア地誌、都市に関連する研究  
現代ロシア文芸の研究と紹介。  
社会主義などの社会理念と文学との関係の研究。  
文学研究や紹介に便利なツール（DB）について。

個人的には の領域に入る「ロシアの北/北のロシア」や、ペテルブルグをめぐる一連の研究<sup>1</sup>が非常に興味深かった。土地や都市にまつわるイメージが文学作品を生み出す想像力の源泉となったことや、都市が実態のないイメージを生成するロシア独自の心象を考察したものである。 の研究などは近代日本文学を立ち上げる原動力ともなったロシア文芸批評の研究であり、おそらくはバフチンなどの研究とも連続している<sup>2</sup>。 は、「コンコードダンス」や「データベース」などの運用、開発をさす。地味だが重要で有益な作業だ。

また、現代ロシア文学やペテルブルグ文学については『ユリイカ』などのいくつかの紹介がある。現代ロシア文学には、これらから入るのがもっとも簡便であろう。

さて、望月の興味は大きく「文学」と、その文学を立ち上げる「環境」に分けられるだろう。環境とは、ロシア地誌や都市イメージなどの研究および、文学理念を規定していた社会主義リアリズムなどの研究である。

---

<sup>1</sup> 「サンクトペテルブルグはいかにして文化の発信地となりえたか。」

「ペテルブルグ文学」『スラブの文化』平8。など。

<sup>2</sup> たとえば、二葉亭四迷がペリンスキーの文芸理論を勉強していたことは有名。

文学に関する研究は、大きくロシア近代文学の研究と、現代文芸の紹介に分けられる。

さらに、ロシア近代文学に関する研究の中心は「ドストエフスキーにかかわるもの」と、「批評」とに分けられる。もちろんこれだけではないが、先に「ドストエフスキー」に関するいくつかの研究を見てみたい。

## 2.1 ドストエフスキー研究

ドストエフスキーに関わる研究方法は「考証的な読み系」、少し離れて「現代での受容」の二領域に分けられる。

### 2.1.1 ドストエフスキーに関する読み系論文

ドストエフスキーについての考証的論文とは「ドストエフスキーのテキストを読む際に、文化的に深長なコンテクストを内包する語彙、表現、プロットなどのデノテーションを確定し、コンテクストを紹介するもの」と定義しよう。分かりやすくいうと、「実は深い意味がある語彙の紹介」である。

代表としては「19世紀ロシア文学におけるイエズス会のイメージ」<sup>3</sup>である。

すなわち19世紀ロシアの文学作品や評論におけるイエズス会士イメージの類型を調べることにより、『カラマーゾフの兄弟』に現れた同会士のイメージのルーツやその特徴を探るのが本論の主な目的である<sup>4</sup>

「言説」「言語」と典型的な表現様式を調べ、それがどのようなコンテクストから読まれるのかを考えるのが考証系の論文としよう。<sup>5</sup>また、「未成年」におけるИдеяと対話」<sup>6</sup>などもこうした系列に入ると思われるが、こちらはより「テキスト論」志向が強い気がする。とはいえ、作者の視点を探るというドストエフスキー論のフレームにより考察されているので、純粋な意味でのテキスト論とは異なる。

また、「ドストエフスキー：評論家と小説家」など、作家論との関連で研究が進められる事が多い。バフチンやカバトなど、評論家たちの批評を検討していくのもこうした作業の中である。

---

<sup>3</sup> 「19世紀ロシア文学におけるイエズス会のイメージ 『カラマーゾフの兄弟』読解へのステップ」『スラブ・ユーラシア学の構築 研究報告集 第10号 19世紀ロシア文学という現代』北大スラブ研 2005年

<sup>4</sup> 同上。

<sup>5</sup> 本来考証的な論文とは、作家の生年や初出の調査、辞書の調査などの確定的な情報を扱うものと思われるが、海外で文学の研究をする場合そうした実証系の研究を行うのは困難を極める。望月にそうした実証系の論文がないのも、しかたのないところであろう。

<sup>6</sup> 『ロシア語ロシア文学研究』(12),42-57,19801015 初出。

[http://nsl.nii.ac.jp/els/contents\\_disp.php?id=ART0001635747&type=abstract&lang=jp&host=cinii&&lang\\_sw=&no=1165135311&cp=](http://nsl.nii.ac.jp/els/contents_disp.php?id=ART0001635747&type=abstract&lang=jp&host=cinii&&lang_sw=&no=1165135311&cp=)

### 2.1.2 ドストエフスキーの現代における受容。

これに関しては後述するが、ドストエフスキーが現代の作家たちにどのように理解され、展開されているかについての論考である。代表としては、望月の著作である『ドストエフスキー・カフェ』<sup>7</sup>にそれまでの論考をまとめた形で紹介されている。

一つの基本認識は、文化の世界における受容と供給の符号である。すなわち体制崩壊後のアイデンティティ危機の時代にあって、参照すべき「他者のテクスト」を求めていた現代文学に対して、よく似た体制変動期の精神的危機を描いたドストエフスキーが、格好の材料を提供しえたという事実である。<sup>8</sup>

### 2.2 批評の検討。

ロシア近代文学研究のもうひとつの柱が「批評言説」の検討と研究である。19世紀の批評が主な中心だけでも、この「ロシアにおける批評言説」の検討は、ほかの領域を研究するときにもかならず参照される、方法論的な意味でも「柱」である。

代表としては、「有機的批評の諸相 アポロン・グリゴリエフの文学論」<sup>9</sup>だろう。アポロン・グレゴリエフ(1822 - 1864)の「有機的批評」と称される評論についての研究は、また19世紀のさまざまな批評理論との比較、検討を通して、19世紀言説史の様相を呈している。また、「社会主義リアリズム論の現在」<sup>10</sup>などもテーマとしては に入るが、方法論としてはこちらに入るかもしれない。現代批評家の「ソ連」の解釈の紹介などもれんぞくする仕事である。

とくにこうした研究の検討対象の広さが特徴ともいえる。具体的には論文を回すのでそちらにあたってほしい。

### 2.3 望月哲男の読みかた。

「考証的読み系」の論文といったのは、いわば理論的なフレームに依拠して展開する「ポストモダンの読解」と区別するため暫定的にそう呼称した。そうした「ポストモダンな読み」を望月が展開した論文は見たことがない。研究である以上、ある程度の証拠能力をもつ作家論を展開することは常識的にみても、とくに作家の紹介という点からも有意義だ。とはいえ、ジュネットの分類などを適宜使用することはいくらかでもあるし、いわゆる「文学理論」として紹介されるパフチンなどへの言及は相当多い。フーコーなどの言及も多少みられるし、いわゆる「理論嫌い」ではないことは断っておいたほうがいいたろう。

基本的には先行研究の批判、検討の積み重ねが望月論文を支える方法論といってさしつかえない。いきつくところまでいってしまった日本近代文学研究のような大規模な研究領域と違い、他

<sup>7</sup> 『ドストエフスキー・カフェ 現代ロシアの文学風景』東洋書店、2005。

<sup>8</sup> 同上。p61。

<sup>9</sup> 「有機的批評の諸相」

<sup>10</sup> 「社会主義リアリズム論の現在」『岩波講座 文学10 政治への挑戦』岩波書店 2003

国の文芸を相手取り、紹介するための手続きとして正統的な方法論がとられたのかもしれない。もちろん、望月の高い知性と鋭い分析力、紹介するための手際、圧倒的な語学力があって可能な仕事である。

また、サンクトペテルブルグの研究なども類似した方法論によってなされているが、詳述している余裕がない。

とまれ、地味ではあるかもしれないが適切な方法論が「現代ロシア文学」を見るときの一つの視点を提供していること、望月が「ポストモダン文学」に接するときの態度と連続していることが注目に値する。それが存分に発揮されるのは、マカーニンやソローキンを紹介するさいの手つき、つまり、ロシア流ポストモダン作家たちの紹介の仕方である。

### 3 講演会との結節点。

今回の講演会のテーマと関連する望月の業績を探ろう。読者がアクチュアルな態度をもち接すべき、現代の刻印あるテキストについての言及。それならば、やはり「現代ロシア文学」についての研究成果に触れなければならない。「現代ロシア文学」について、望月はほぼ第一人者といってもいい論文数と質を誇る。

「ポストモダンと現代ロシア文学」<sup>11</sup>および「空虚とポストモダン文芸」<sup>12</sup>は、社会主義リアリズム以降の流れを概括するために必読の論文である。絶対に読んでおくこと！！！！

以下、「ポストモダンと現代ロシア文化」目次を並べておく。

はじめに

- ・ リアリズム文学と新傾向の文学
  - 1. リアリズム文学
    - 1) 筋の明確さ 2) 時・空間の一貫性 3) 人格の一貫性
    - 4) 思想のレベルの単一性 5) 叙述の隠蔽 6) 意味の単一性
  - 2. 新傾向の文学
    - 1) 筋の複雑さ 2) 時空間の複数性 3) 「人格」の非一貫性
    - 4) 思想の多元性 5) 叙述の自己顕示 6) 意味の複数性の主張
- ・ ポストモダン文学の概念
  - 1. 大きな物語の終焉
  - 2. シミュレーション
  - 3. 倒錯した芸術世界
  - 4. 多重の定義
- ・ ポストモダンとロシア
  - 1. 発生とドミナンス

<sup>11</sup> 「ポストモダンと現代ロシア文学」 <http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/literature/post.html>

<sup>12</sup> 『現代ロシア文化』国書刊行会、2000、所収。

## 2. 倫理的および審美的な批判

- 1) 個別的批判の限界性
- 2) 反イデオロギーの逆説

## 3. ポストモダンとソ連文化

- 1) ポストモダンとアヴァンギャルド

### 2) ソ連文化ポストモダン論

- a. ポストモダンのコンテクスト
- b. シミュレーションとしてのロシア史
- c. ソ連版ポストモダンの諸側面
- d. ポストモダンとしての社会主義リアリズムとコンセプチュアリズム
- e. ソ連文化ポストモダン説の逆説

## まとめ

内容については各自必ず確認しておくこと。ネット上からも手に入る。

ロシア批評家たちが、ペレストロイカ以降の状況をリオータルやボードリヤールの「ポストモダン」思想と関連付けて、SFなどの流れも汲む意味世界が溶解した作品群を定義していく流れ、また、アヴァンギャルドとの比較や、ロシアにおけるモダン概念との関連なども含めて、さまざまな批評家の言説を追って研究する。調査の行き届いた論文である。

この論文では、望月はロシア・ポストモダン文芸の要件を限定付きながら以下のように結論付ける。

1. 現代ロシアの文学作品の一部は、筋や時空間の複雑さ、アイデンティティーの曖昧さ、思想的多元性、叙述の顕示、意味の複数性といった諸点で、従来のロシア文学とは異なった傾向を示している。
2. こうした文学は、物語の終焉、シミュレーション的現実などの意識に基づき、一定の心的態度や創作手法を共通特徴としてもつ、ポストモダンと呼ばれる現代文学のグループに属するものと考えることができる。
3. ロシアのポストモダンに関する言説は、倫理的・審美的レベルでの議論と、その起源に関する議論とを含んでいる。こうした言説のいくつかは、ポストモダンの逆説的な性格を浮かび上がらせている。すなわちイデオロギーの無効性を前提とするポストモダンは、それ自体がイデオロギーとして作用する可能性をもっている。またポストモダンの起源に関する議論の中で、ポストモダンの意識自体が歴史論に投影されてゆく、歴史のシミュレーションが生じる可能性がある。

ロシア・ポストモダン文学が、ポストモダンを用意する政治的な背景を基に成立してきことや文学以外のポップカルチャーの隆盛<sup>13</sup>などはさておくとして、問題は、それらの作品をどうやって

---

<sup>13</sup> t.A.T.u ですね。はい。それから、自由化がはじまったロシアでは新興の富豪が出る一方、高齢者たちがホームレス化するなどの社会問題があるようです。

読んでいくのか？ という点に尽きるだろう。

具体的なロシア・ポストモダン文芸の諸相については触れる余裕がない。ポストモダン文学の具体的なテーマや文学的源泉を検討する必要もあるだろう。

そこでてっとりばやく、望月の論文からドストエフスキーとポストモダン文学との連続性を検討しよう。いわば、ポストモダンが自分たちのアイデンティティとする「アンモラル・アンチモラル」を展開させるための他者として、ドストエフスキーが必要とされてきたこと、ロシア・ポストモダンがポストモダンの手法として「広義のパロディ」を採用してきたこととにふれたい。

#### 4 ロシアのポストモダン。

ドストエフスキーの作品、登場人物、作者が「パロディ・パステージュ(は微妙)・シュミラークル(という語は使われないが)・パランブセスト」などとして、つまり加工文化として再生産されている現状を知っておく必要がある。ポストモダン文学の系譜からみて、このパロディ化が必然的な傾向であることを、前述した「ドストエフスキーの現代的受容」に関する一連の研究が論証している。ドストエフスキーがロシア・ポストモダンの担い手たち(マムレーエフ、マカーニン、アイトマートフ、クワルディン、マカーニン、ナルヴィコワら)にとって特別な対象、欲望の対象である。具体的な作品にこの章でふれている時間はないが、「『白痴』の現代的リメイクをめぐる」<sup>14</sup>という論文では、「検討対象となる作品群」を断ったうえで、それらの展開を以下のように述べる。

ドストエフスキー・イメージの扱い方に応じて三種類に分類した。

- (1) ドストエフスキーの作品の主題を現代の文脈で新たに展開しているもの。
- (2) ドストエフスキーをめぐる議論や彼のイメージ自体を作品のテーマとしたもの。
- (3) ドストエフスキーの文体模写やパロディを作品構成の重要な要素として含むもの

望月は、これだけでは不十分なため、もうひとつのジャンルを追加する。

#### (4) 小説のリメイク

フョードルミハイロフという作家によるドストエフスキーの長編の現代的改作、『白痴』(ザハロフ社;2001)である。(中略)内容的には、原作のプロット構造をそっくり残したまま、時空間設定、社会的背景、固有名詞や語彙といった様々な要素を20世紀末ロシアに適合するよう改変した、精巧なリメイクである。原作の電子テキストに逐文的に手を加えるというその手法も、また出版と並行してインターネット上に全文が掲載されるという流通のあり方も含め、きわめて「現代的」な背景を持っている。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> 「『白痴』の現代的リメイクをめぐる」

<sup>15</sup> 同上。p 112

こうした「加工文化」のありかた、文人の受容のされ方は、ロシア・ポストモダンの一側面の、しかも特徴的な特徴と言えるだろう。言い方をかえるなら、ロシア・ポストモダンが必然として要求する古典文化のリヴィジョン、その必然的な帰結がパロディという形で現れているのだ。と、ここまでかけば、私が高橋源一郎と望月哲男の接点に何を考えているのか見えてくると思われるが、その前に望月が具体的にどのような手つきでポストモダン文学にふれているのかを考えてみよう。

## 5 ソローキンとマカーニン。

この章では、望月がどのようにポストモダン文学を紹介するかを注目する。スラブ研究センターの「現代ロシア文学」DBから入手できる「ウラジミール・ソローキン『青脂』」<sup>16</sup>と「ウラジミール・マカーニン『アンダーグラウンドあるいは現代の英雄』」<sup>17</sup>を中心に扱う。二作品とも、ドストエフスキイ・パロディの代表でもある。『青脂』は前述(3)の代表、『アンダーグラウンド』は(1)の代表として、前掲論文にあげられている。

また、とくにソローキンは現代ロシア文学者のなかでも最重要人物の一人である。ぜひ読んでほしい。もちろん、翻訳がほとんどないという事態にかなしんでももらいたい。

具体的なプロットや物語については、割愛。これらもぜひググって読んでおいてもらいたい。不安定な時空間、曖昧な人物のアイデンティティ。どちらも一筋縄ではいかない、ポストモダン文学の特徴をそなえている。

望月はこうした作品群を、主題という柱をのせることで紹介しようとする。しかしそれは大体において「難しい」。

作品はきわめてラフに設定された骨組みに、局部的に肥大した肉付けがなされていて、総合的な読み方は難しい。複製作家の作品執筆を通じてしか生成されないという青い脂身の寓意や、2068年と1954年という時間の意味などを一義的に捉えること(あるいは意味の有無を判断すること)は、評者にはできない。ここではいくつかの要素について個別にコメントしたい(『青脂』)

このコメントが、つまるところ講演会の柱である「読者」の問題に直結する。望月は「作品」を一義なものとして読む古典的、あるいは素朴な解釈の限界をあっさりと吐露し、ポストモダン文学である(という意味には多義的な響きがあると思うが)『青脂』を読むために「個別な要素」の言及へとシフトする。ごく簡単な紹介だから、という理由ももちろんあるだろうが、こうした個別な諸要素への言及、あるいは、読むための方法論が必要になってくるということである。「主題」の設定という読みの行為が陳腐だということではなく。

また、そうした読みの公準を要求するのが、ロシアのポストモダンだともいえるだろう。マカ

<sup>16</sup> <http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/literature/sorokin-4.html>

<sup>17</sup> <http://src-home.slav.hokudai.ac.jp/literature/makanin-2.html>

カーニンの『アンダーグラウンド』の紹介は、そうした解釈の柱に「言葉」と「アンダーグラウンド」というトポスとの関係を持ち込んでのものだ。

この作品の地下世界(アンダーグラウンド)は、まず主人公に代表される世代の生き方のスタイルとして、彼らの心中に場所を占めている。アンダーグラウンドとは、ソ連公式文化に対する非公式文化世界であり、個人の内面世界に例えれば、超自我に対する下意識世界であった。意識が下意識世界を前提とするように、社会もアンダーグラウンドを構造的に必要とする。すなわち政治家、警官、医者、ビジネスマン、売れっ子詩人などが棲息する機能的で管理的な表社会と、ホームレス、病人、ベトナム人、やくざ、無名の作家などが住むアモルフな裏社会である。(『アンダーグラウンド』)

(中略)

精神と肉体を病んだ彼は人格を失いかげ、言葉(ロゴス)から見放されようとする。そしてその遍歴の果てに、同じくアンダーグラウンド作家の友人や精神を病んだ弟との交情の中で、再び言葉の力への信頼を取り戻すことになる。これは言葉の死から再生までの、曲折に満ちた物語なのだ。

ただしカーニンの緩やかな物語展開はそうした主題をむしろ押し隠し、一見果てしなく逸脱していくエピソードを目立たせるのだが。(同上)

主題を押し隠し、エピソードの群が主題に拮抗していく作品だともいえるだろうが、そのような記号の集積にたいして、水準を設けて読解していくことが、ポストモダンとの付き合い方なのだろう。望月は、そうした水準に留意して作品を紹介する。その紹介の仕方が、多義的な解釈を「前提」とするポストモダン文学を、(或る意味で)妥当に読んでいくためのヒントになる。つまり、ポストモダンは理解可能か否かという問題のなかで、理解可能、教育可能なものとして「紹介」する。そういう紹介の仕方、読みの柱の立て方に、研究者としての、望月の特徴があるといってもいい。その上で、望月の読みを「相殺」する構成をもっているのが現代のポストモダン文学なのだともいえるかもしれない。しかしそれらに批評的な検討を加えようとしても、わたしたちにとって非常に苦しい問題として、これらの作品に翻訳がない(出版されない)。という悲しい現実がある。

ポストモダンだけの問題ではないが、作品紹介や読解のためには理論的な知識も必要になるケースもあり、理論を踏まえて創作を展開するケースも往々にしてあるが、理論の適応については少々厄介な問題を含むため、今回はそこまで述べられまい。

## 6 現代ロシア文学の諸相。

このような現代ロシア文学の諸状況について概観したいが、前掲論文に譲る。しかし、現代ロシア文学はポストモダンなものばかりではない。リアリズム小説にも優れたものがあるし、80年代からの女流作家たちの活躍や、ポストモダン文学の土壌となったSFの隆盛、現代ではポップカルチャーの流布や、ハリウッド映画の影響などで、いわゆる「ハリウッド風味」の映画、文化がロシアでも生産されるようになってきていること、アヴァンギャルドなどとの関係もある指摘しておきたい。

## 7 ポストモダンを感じる世代？高橋源一郎との接点のなかで。

ここまで、望月哲男の仕事を、中身を抜きに概観してきたが、今回高橋源一郎との対談の中で指摘しておきたいのは、やはり同い年、世代の問題があるだろうといえる。

つまり、「僕ら」今現在十台後半から二十代前半の若者たちは、もう生まれたときからポストモダン文学や、価値が相対化していた。しかし、源一郎たちの世代はそうではないだろう。

まさか「モダン」を経験した、とまではいわないけれど「ポストモダン」がまさに新しい現実として建ち現れてきた世代だったといえるかもしれない。かもしれないだけで、わからないけれど、とにかく「僕ら」とは異なる衝撃で「ポストモダン」を受け入れたのだらいう推測は間違っではないと思う。

パロディとは、いわばパロディを「する・される」関係の中で記述制約を受ける。つまりパロディをすることで、そのパロディをされるものにパロディしたエクリチュールは記述、読解両方の制約を受ける。たとえ、そのパロディされた記号が、交換可能なものだったとしても、（あるいは交換可能なものとして立ち現れるからこそ）だ。パロディをされるものが、どれほどその内実を骨抜きあるいはガス抜きされてしまっていたとしても、「夏目漱石」は「村上春樹」に換装可能でありながら、同時に換装不可能な存在として、記述されるのだ。よくわからない説明を加えたのは、このパロディの問題が、二つ、現代文学におけるパロディの可能性 加工文化によってパロディの主体がアイコン化する問題に直結するからで、僕の興味関心はモロに にあることを明記しておこう。

パロディの可能性はあるのだろうか。あるとすれば、そして、高橋源一郎がそれをつかったその瞬間に、僕らに見えている以上にその可能性があることがあったら、そのときにパロディやパランプセストといった技法の意味、使い古された技巧の意味も見えてくるのだろうか。

望月哲男と高橋源一郎の再接近領域は、このパロディやパランプセストの問題になるだろう。その上で、それらを生み出したポストモダンという状況に接点があるのではないだろうか

おわりに

パロディの技巧についてすごく突っ込んだことを言おうと思っていたけれどやめる。

次回の勉強会では、今回とりあげたトピックの中で、とくに会員が興味を持ってそうなものを取りあげたい。今回は勉強会というより、紹介なのだから。そしていわせてくれ。

ロシア、最高。

次回の予定。

- ・ 日本におけるスラブ研究の現在。
- ・ 望月論文の検証。ドストエフスキー、現代ロシア文学。

- ・ ロシア・ポストモダンの紹介。
- ・ ロシア現代文学の研究。
- ・ 高橋源一郎の作品との関係を探る。
- ・ パロディについての研究。
- ・ 社会主義リアリズムなどの研究（こうしたものが研究できるのも現代のメリットである）
- ・ ロシア近代文学の研究。
- ・ 都市論、地理論の研究。

#### 主要研究業績一覧

\*わたしの主観により重要と思われるものに下線を引いた。

#### 著作

##### (3) 編著

(川端香男里、中村喜和と) 『スラブの文化』,343(弘文堂)(1996)

・『ロシア文学の近景』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,No.21,82(1997)

・『ロシア文学の多様性』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,No.41,74(1997)

・(宇山智彦と) 『旧ソ連・東欧諸国の 20 世紀文化を考える』スラブ研究センター研究報告シリーズ,No.64,177(北海道大学スラブ研究センター)(1999)

・『現代文芸研究のフロンティア(1)』スラブ研究センター研究報告シリーズ,No.70,145(北海道大学スラブ研究センター)(2000)

"Russian Culture on the Threshold of a New Century",308,(Slavic Research Center,Hokkaido University)(2001)(in Russian and English)

#### 学術論文

##### 単著

・「ポストモダンと現代ロシア文学」,『ロシア文学の変容』r スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,16:61-85(1996)

"Tema Kazuistikiv romane 'Brat'ia Karamazovy' Dostoevskii mirovaiakul'tura,"127-133,Moskva(1996)(再録)

・「ドストエフスキー論をめぐって:バフチンの内部と外部」,『ミハイル・バフチンの時空』,108-117(せりか書房)(1997)

・「現代文学におけるロシア論—『空虚なロシア』のイメージをめぐって—」1,『スラブ・ユーラシアの変動—自存と共存の条件—』平成 9 年度重点領域公開シンポジウム報告集,15-25(北海道大学スラブ研究センター)(1998)

・「ドストエフスキーの小説『おとなしい女』にみる時間意識」,『スラヴ学論叢』3(2):203-214(北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室)(1999)

"Postmodernism in Russian Prose Literature of the Nineties", (Bettina Henn, Anja Kreisel, Dagmar Steinhilber, eds., *Das Eigene und das Fremde in der russischen Kultur: Kontinuität und Diskontinuität in der Selbstdefinition in Zeiten des Umbruchs, Dokumente und Analysen zur russischen und sowjetischen Kultur*, Band 18, 63-96, Ruhr-univ., Bochum, 2000)

"ThePendulumisSwingingInsensiblyandDisgustingly:Timein

Krotkaia>","*DostoevskyStudies*(TheJournalofInternationalDostoevskySociety,Germany),4:71-82(2000)

・「空虚とポストモダン文芸:ペレーヴィンの作品を中心に」,(望月哲男・沼野充義・亀山郁夫・井桁貞義他『現代ロシア文化』,301-330,国書刊行会,2000)

・「ドストエフスキーの小説『おとなしい女』にみる時間意識」,(木下豊房、安藤厚(編著)『論集・ドストエフスキーと現代』,153-172,多賀出版,2001)

・「パラドックスとポリフォニー」,(木下豊房、安藤厚(編著)『論集・ドストエフスキーと現代』,369.376,多賀出版,2001)

・「ドストエフスキーのいる現代ロシア文学」,『ロシア文芸研究のフロンティア(II)』スラブ研究センター研究報告シリーズ,76:132499(2001)

"Igraiasoslovamiklassiki:Dostoevskiivsovremennoiliterature", (TetsuoMochizuki(ed.),*RussianCultureontheThresholdofaNewCentury*,159-177,SlavicResearchCenter,HokkaidoUniversity,2001)

## その他の業績

### (2)書評

・江川卓著「謎とき『白痴』」,『ドストエフスキイ広場』,5:63-65(1996)

・「ロシア・東欧(1998年回顧)」,『週刊読書人』,4(1998.12.25)

・大石雅彦著『聖ペテルブルク』(水声社,1996),『ロシア語ロシア文学研究』,30:148450(1998)

・亀山郁夫著『破滅のマヤコフスキー』,『週刊読書人』,5(1999.1.29)

・「ロシア・東欧(1999年回顧)」,『週刊読書人』,5(1999.12.24)

・ヴィーリ・ミリマノフ(桑野隆訳)『ロシア・アヴァンギャルドと20世紀の美的革命』,『図書新聞』,4(2001.10.13)

### (2)翻訳

・アンドレイ・シニャフスキー著「散文の空間」,『スラブの文化』,319-332(弘文堂)(1996)

・ユーリー・ロートマン『ロシア貴族』(共訳),1-545,i-XI(筑摩書房)(1997)

・ミハイル・エプシテイン「ポストモダニズムとコミュニズム」,『現代思想』,80-102(1997)

・ヴラジーミル・ソローキン著『ロマンI・II』,417、375(国書刊行会)(1998)

・「ドストエフスキーに関する二人の同時代人の回想」,『現代ロシア文学作品集IX』,57-67(北海道大学ロシア文学研究室)(2000)

・アレクサンドル・ゾロチコ「アンナ・カレーニナー2」,『現代ロシア文学作品集X』,46-48(北海道大学ロシア文学研究室・スラブ研究センター)(2001)

・「ヴィクトル・ペレーヴィン『ジェネレーションP』部分訳と解説」,『早稲田文学』,No.9:4-12(2001)

・グリゴリー・チハルチシヴィリ(越野剛、清水道子、中村唯史、望月哲男訳)『自殺の文学史』,373(作品社)(2001)

### (4)その他

・A.ジチンスキー「失われた家、もしくはスターン卿との対話」(作品解説),『ロシア文学の現在』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,7:75-82(1996)

・E.ダトノーヴァ「ディシデートチキ」(作品解説),『ロシア文学の現在』「スラブ・ユーラシアの

変動」領域研究報告輯,7:83-87(1996)

・A.コロリョーフ「エロン」(作品解説),『ロシア文学の変容』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,16:26-34(1996)

・G.ヴラジーモフ「将軍とその軍隊」(作品解説),『ロシア文学の変容』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,16:35-44(1996)

・A.ヴァルラーモフ「誕生」(作品解説),『ロシア文学の変容』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,16:45-49(1996)

・「ロシア:言葉をめぐる言葉」(概説),『ユーラシア研究』,10:51-55(1996)

・「ヴィクトル・ペレーヴィン」(越川芳明他編『世界 X 現在 X 文学作家ファイル』,272-273,国書刊行会,1996)

・「ロシア・東欧(1996年回顧)」,『週刊読書人』,4(1996)

・「パラドクスとポリフォニー」(報告要旨),『スラヴ学論叢』,2:237-241(北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室)(1997)

・ヴィクトル・ペレーヴィン「チャパーエフとプスタ」(作品紹介),『ロシア文学の近景』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,21:36-47(1997)

・アレクサンドル・フルギン「オーストラリア」(作品紹介),『ロシア文学の近景』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,21:62-65(1997)

・パフィット・ケンジェーエフ「イワン・ベズウグロフ」(作品紹介),「若き目の芸術家の肖像」『ロシア文学の近景』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,21:75-81(1997)

・ドミートリー・リプスケーフ『チャンジョエ40年記』(作品紹介),『ロシア文学の多様性』『ロシア文学の近景』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,41:70-74(1997)

・ヴィクトル・ペレーヴィン『チャパーエフとプスタ』(作品紹介),『ユリイカ』,194-195(1997.4臨時増刊)

・「プスタについて」(エッセイ),『ユリイカ』,284-285(1997.4)

・「ロシア世紀末の自画像 1:未来の後とカオス」(エッセイ),『しゃりばり』,10:15.19;「ロシア世紀末の自画像 2:アネクdotと小説」,11:15.201「ロシア世紀末の自画像:祭と政治」,12:29-35((社)北海道開発問題研究調査会)(1997)

・「『作家の日記』について」,『ちくま』,16-17(筑摩書房)(1997)

・「1997年回顧:ロシア」,『週間読書人』,4(1997)

・「ロシア文化はポストモダンか?」,『北海道大学スラブ研究センター公開講座:ロシア文化の新しい世界』,5-20((社)北海道開発問題研究調査会)(1997)

・「ワシーリー・アクショーフ『肯定的主人公の陰画』」,『ロシア文学の展開』,99-103(1998)

・「ウラジール・ソローキン『ドストエフスキー・トリップ』」,『ロシア文学の展開』,104-107(1998)

・「ミハイル・チュラキ『カローン』」,『ロシア文学の展開』「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯,63:93-98(北海道大学スラブ研究センター)(1998)

・「ロシア世紀末の自画像 4:ロシア論と文学」,『しゃりばり』191:31-38;「ロシア世紀末の自画像 5:機械とネジ 1」『しゃりばり』192:33-40;「ロシア世紀末の自画像 6:機械とネジ 2」『しゃりばり』193:27-31「ロシア世紀末の自画像 7:アネクdotと新ロシア人」『しゃりばり』194:25-31「ロシア世紀末の自画像 8:ドストエフスキーと現代」『しゃりばり』195:29-35;「ロシア世紀末の自画

像 9:ボリスとグレープ」『しゃりばり』196:41-47(1998)

・「ドストエフスキー・トリップ」,『ユリイカ』,30-4:284-285(1998)

・「袋小路はなぜ果てしないか」,『ユリイカ』,30.11:278-279(1998)

・「現代ロシア文芸共同研究の試み」,『学術月報』,53(1999.8)

・ウラジーミル・ソローキン『青脂』(概説),『現代文芸研究のフロンティア(1)』スラブ研究センター研究報告シリーズ,70:32-40(北海道大学スラブ研究センター)(2000)

・ヴィクトル・ペレーヴィン『ジェネレーション P』(概説),『現代文芸研究のフロンティア(1)』スラブ研究センター研究報告シリーズ,70:68-76(北海道大学スラブ研究センター)(2000)

・ウラジーミル・マカーニン『アンダーグラウンドあるいは現代の英雄』(概説),『現代文芸研究のフロンティア(1)』スラブ研究センター研究報告シリーズ,70:111-118(北海道大学スラブ研究センター)(2000)

・「世界文学・文化アラカルト(ロシア):母国語の純化ねらうプーチン氏」,『北海道新聞』,8(2000.4.28 夕刊)

・「現代ロシア文芸と歴史意識」,『東亜』6:4-5(霞山会)(2000)

・「世界文学・文化アラカルト(ロシア):ネット小説で著作権騒動」,『北海道新聞』,9(2000.7.18 夕刊)

・「形と意味:ソローキンの小説について」,『蟻蜂蟻蜂』,8:8-10(2000)

・「世界文学・文化アラカルト(ロシア):亡命作家の誇りと絶望」,『北海道新聞』,10(2000.10.10 夕刊)

・「ロシア文学の現況と翻訳・研究 2000」,『文芸年鑑平成 13 年版』,81-84(新潮社)(2001)

・「現代ロシアのゴゴリ」,『ロシア文化通信群 18』,2-3(群像社)(2001)

・「物まね小説の読み方」,『ユリイカ』,・No.8:262-263(2001)

## ・ 2006 年度版点検評価。

### 著作

#### (1) 単著

・『ドストエフスキー・カフェ: 現代ロシアの文学事情』[ユーラシア・ブックレットNo. 81] 63 (東洋書店, 2005)

#### (3) 編著

・『現代文芸研究のフロンティア(IV)』[スラブ研究センター研究報告シリーズ93] 100 (札幌, 2003)

・『現代文芸研究のフロンティア (V)』[スラブ研究センター研究報告シリーズ94] 61 (札幌, 2004)

・『現代文芸研究のフロンティア (VI)』[21 世紀COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」

研究報告集4] 62 (スラブ研究センター, 札幌, 2004)

・『現代文芸研究のフロンティア (VII)』[21 世紀COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集9] 196 (スラブ研究センター, 札幌, 2005)

・ *21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 6-2, Siberia and the Russian Far*

*East in the*

*21st Century: Partners in the "Community of Asia": Chekhov and Sakhalin*, xii+79 (SRC, Sapporo, 2005)

- ・ ( 越野剛と) 『19 世紀ロシア文学という現在』 [21 世紀COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集10] 130 ( スラブ研究センター, 札幌, 2005)

2 学術論文

(1) 単著

- ・ 「  
」,  
, 1:135 -140 (2002)
- ・  
:  
「  
」 ( :  
60 -  
, 371 -376,  
, 2002)
- ・ 『白痴』の現代的リメイクをめぐって 『スラヴ研究』 49:111 -146 (2002.4)
- ・ 「現代風ドストエフスキイ：伝説と加工」「ロシアの北/北のロシア」( 望月哲男編『現代文  
31

2. 研究活動

芸研究のフロンティア( )』 [ スラブ研究センター研究報告シリーズ93] 40 -64;89 -100, 札幌, 2003)

- ・ 社会主義リアリズム論の現在(『岩波講座 文学10 政治への挑戦』 93 -111, 岩波書店, 2003)
- ・ 19 世紀ロシア文学におけるイエズス会のイメージ: 『カラマーゾフの兄弟』読解へのステップ (『19 世紀ロシア文学という現在』 [21 世紀COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集10] 33 -52, スラブ研究センター, 札幌, 2005)

(2) 共著

- ・ ( 福間加容と) ソローキンと絵画: 小説『ロマン』と19 世紀ロシア美術 (『現代文芸研究のフロンティア (VII)』 [21 世紀COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集9] 41 -68, スラブ研究センター, 札幌, 2005)

3 その他の業績

(2) 書評

- ・ 沼野充義著 『徹夜の塊：亡命文学論』 『週刊読書人』 5 (2002.4.19)
- ・ 亀山郁夫著 『磔のロシア：スターリンと芸術家たち』 『日本経済新聞』 ( 朝刊) 22(2002.7.21)
- ・  
( ),  
( ). XXI  
:  
, 2002, 560, *Japanese Slavic  
and East European Studies*,  
23:138 -145 (2003)

- ・  
( ),  
( ). XXI  
:  
:

ア文学研究』35:139-141 (2003)

- ・ ブライアン・ボイド ( 諫早勇一訳) 『ナボコフ伝 ロシア時代 上下』( みすず書房, 2003) 『週

間読書人』2月13日:5 (2004)

(3) 翻訳

- ・ アンドレイ・リョーフキン 『ロシア民話としてのドストエフスキ』( 望月哲男編 『現代文芸研究のフロンティア( )』[スラブ研究センター研究報告シリーズ93] 65-88, 札幌, 2003)
- ・ ワシーリイ・アクショーフ「黄身(『タマゴの黄身』第8章)」『現代ロシア文学作品集』[北大文学研究科西洋言語文学研究室]13:111-131 (2004)
- ・ ( 沼野充義と) エドワード・ラジンスキー 『真説ラスプーチン』( 上・下) 477; 441+15 (NHK 出版,

2004)

(4) その他

- ・ 10年目のロシア・ブッカー賞 『ユリイカ』4:270-271 (2002)
- ・ ロシア文学の現況と翻訳・研究2001 『文芸年鑑平成14年版』84-87, 新潮社, 2002)
- ・ ソローキンのこころ 『ユリイカ』10:220-221 (2002)
- ・ ( 学会紹介) Dostoevsky and Germany: From the XI Symposium of the International Dostoevsky Society in Baden-Baden (4-8 October, 2001)(*Neue Beitrage zur Germanistik, Band1/2002*, 253-255, Japanese Association for Germanistics, 2002)
- ・ 世界文化・文学アラカルト(ロシア) 『北海道新聞』夕刊(2002.2.19; 5.21; 8.6; 10.29)
- ・ 世界文化・文学アラカルト(ロシア) 『北海道新聞』夕刊(2003.4.15)
- ・ いまどきのペテルブルグ小説 『ユリイカ』8:242-243 (2003)
- ・ 幻想都市の文学 『しゃりばり』259:68-73 (2003.9)
- ・ 男性作家にみるとしても自己意識的なポストモダニズム 『ユーラシア研究』29: 33-38 (2003.11)
- ・ 革命前ロシアの精神風景 『Philharmony』[NHK 交響楽団]12:19-28 (2004)
- ・ 若き人工都市サンクト・ペテルブルグはいかにして学術・文化情報の発信地となりえたか 『ロシア語ロシア文学研究』36:153-154 (2004)
- ・ ( 事典項目)「アイトマートフ」「ヴォイノーヴィチ」「自殺」「社会主義リアリズム」「ソローキン」「ペレーヴィン」「マカーニン」の項目 (『新版 ロシアを知る事典』平凡社, 2004)